東洲斎写楽も曲亭馬琴も、越谷市民の「シビック・プライド」

シビック・プライド越谷新聞

第８号・令和８年11月１日・越谷のシビックプライドを楽しむ会発行


東洲斎写楽・作

☆東洲斎写楽とは、言わずと知れた「八大浮世絵師」の一人。

今年の夏に上野・東京都美術館で開催された「大英博物館の日本美術のコレクション/百花繚乱」展にも作品があった、もう世界級の画家です。

ところが、本当に「写楽」という画家がいたか？という、実在そのものが疑われた時代が続いていたたことがあったのです。

写楽が、あの衝撃的な大判雲母摺の28点を、寛政6年に発表して、その後10カ月の間に合計で130点ほどの作品を残し、消えてしまいました。

10カ月間に130点というのも物凄いですが、それはそうとして、どうして消えてしまったのか、どこへ行ってしまったのか。写楽そのヒトが消えたりしたのではなく、絵を描くことをやめたために「いなくなった」ように見えたのでしょう。では、なぜ、絵を描くことをやめたのでしょう。

その理由については、整理すると次のようになことだと思われます。

①写楽自身が、最初の「あの強烈なパンチのある絵」が描けなくなった

②依頼元である蔦屋重三郎が「写楽は、もうダメだ」と匙を投げた

③当時、写楽の本職は阿波藩所属の能役者であり、士分であったが、士分というは役者絵などというものに関わるべきではないというルールが①

あり、追及されると主君にまで、その累が及ぶ恐れがあり、写楽の場合、最初は気楽にやっていたが、このように江戸市中で話題になると危ないことになりそうで、引く潮時であると、写楽が考えた

以上のような理由のうちのどれかが該当して、筆を折ったのではないかと考えられます。そして、突然の筆折りの理由は写楽本人と蔦重はもちろん知ってはいたが、公表はできず、その２年後に、蔦重は脚気で亡くなってしまい、大変な人気であった写楽はもちろんモノをいわず、実在すら疑われる事態になってしまったと思われます。

その後、明治 43 年（1910）には、ドイツ人のユリウス・クルトが先鞭をつけ、戦前は取上げるものも少なく、戦後になって 30 人以上が、写楽とは誰であったか～に論陣を張られたのですが、ほとんどは「写楽の絵に近い浮世絵作者は誰か」からのアプローチで、結局、真実解明は失敗に終わってしまい、真実は江戸時代に残された文書を丁寧に解明してゆかれた二人と１団体が遂に真実に到達されたということになりました。

そして、そのおかげで、「写楽解明」に、「越谷」はまったく何もしなかったのに、いっぱい、「名前」出させていただくということになったのです。

何十人という「写楽は誰だ」という論争に加わった方々が画法での探索に失敗するなか、成果を上げていただいた二人のうちの一人は内田千鶴子さん。映画監督・故・内田吐夢氏の次男の夫人（1966 生）で、NHK テレビ「能役者・斎藤十郎兵衛」番組への協力から、追跡を始め、能楽の研究から「当時の阿波藩阿波藩能役者は１年ぐらいのお暇時間があった」など、写楽と能楽の関係から写楽を追及。



東洲斎写楽・作

二人目は中野三敏さん。（1935 生。元・九州大学文学部教授。元・福岡大学教授。江戸文化・江戸文学の専門家。2019 逝去）　中野さんは、「増補・浮世絵類考」を柱に「江戸

方角分」「八丁堀絵図」などから、写楽の原像を追及され、文献を頼りに十二分の成果を収めていただきました。ご本人は「写楽の絵はそれほど好きなものではない」とおっしゃるなかで、作者の実像を追及されたのです。

そして、もう一つは法人で、NPO 法人・徳島写楽の会です。（1977 設立）

写楽と思われる斎藤十郎兵衛が士圭之間番という名目の御家人として召し抱えられているとすれば、御家人として「寛政 重修 諸家譜」に菩提寺に関することも掲載されているのではないか～というメンバーがいたのです。徳島県立図書館で調べると、確かに「菩提寺は築地本願寺法光寺」と出ていることがわかりました。

早速、電話局と本願寺に問いあわされて、法光寺さんの越谷移転が判明。お持ちの過去帳により、写楽が現実の人物であることがわかったのです。斎藤家の墓は災禍で不明ですが、お寺で立派な記念碑をお立ていただき、徳島写楽の会に蜂須賀家由緒の阿波・蜂須賀桜の植樹もいただいたのです。<早咲きご注意>



法光寺・過去帳　斎藤十郎兵衛の箇所　中野三敏著「写楽」中公新書・2007・2　中央公論新社刊　から

右の写真は、法光寺さんがお持ちの斎藤十郎兵衛の過去帳の一部。「文政三庚辰年三月七日　大乗院覚雲居士　八丁堀地蔵橋　阿州殿御内斎藤十郎兵衛妻　行年五十八歳千住二テ火葬」とあり。　<文政 3＝1820>

斎藤月岑の「増補・浮世絵類考」には「天明寛政年中の人　俗称斎藤十郎兵衛、居、江戸八丁堀に住す、阿波侯の能役者也一廻りに雲母を摺りたるもの多し」とあり。

別々に書かれた二つの記述の合致が実在の証拠。「写楽の存在」と「写楽＝斎藤十郎兵衛」は絶対となりました。

☆もう一つの「写楽と越谷のお話」

実は、写楽と越谷を結ぶ「太い絆」があるのです。

それは、斎藤十郎兵衛（＝写楽）は、江戸の八丁堀地蔵橋に住んでいたのですが、そのお隣には村田春海という著名な国学者が住んでいました。村田春海の家は、干鰯（肥料用の鰯）を扱う大問屋で、十八大通という吉原遊びなどに大金を使う大尽の一人に数えられていましたが、春海の豪遊がたたり、破産の憂き目にあってしまう。

心を入れ替えた春海は学問に集中、本居宣長



東洲斎写楽・作

を師として仰ぐ学者となったのです。

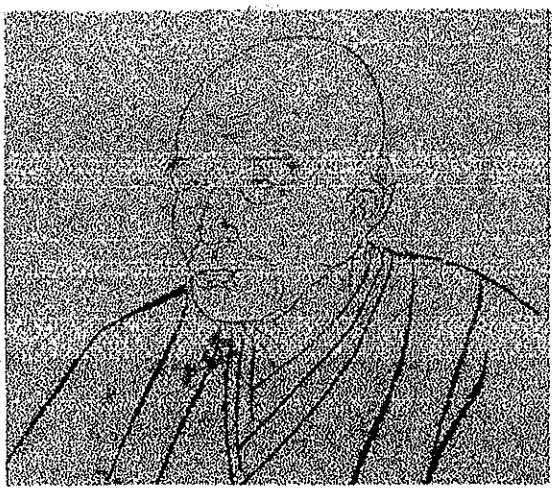
後継者がなかったため、養女に選ばれたのが越谷恩間の国学者・渡辺荒陽の娘・多勢子。

多勢子は江戸時代後期の歌人・国学者 36 人を選んだ「近世三十六選」にも名を連ねるという優れた学者で、江戸住まいの大名の夫人や姫君の家庭教師をしていた多勢子は隣に住む写楽の息子を可愛がって、自分の養子として「村田春路」と名づけ、村田家の「家業」としての国学者の跡を継がせたのです。

何という偶然！　八丁堀地蔵橋の隣同志の「十郎兵衛」と「春路」、「多勢子」。いま、越谷の「三野宮」と「恩間」を土台にして結びついているのです。

☆馬琴は「滝沢」か「曲亭」か。

昔は「滝沢馬琴」だったのですが、「滝沢」は本名で「馬琴」がペンネームなのですから、たしかに「異質」なモノをつなぎあわせるのはおかしく、「曲亭馬琴」とするべきなのでしょう。


曲亭馬琴

「曲亭馬琴」は「曲亭馬琴」と読み、「遊郭でまじめに遊女につくす（野暮な）男」という意味だそうです。元木網、鹿津部真顔、酒上不埒、筆綾丸、加保茶元成、尻焼猿人などの狂歌作者が出た時期なのです。

馬琴さんは、レッキとした武士の出とはいっても、「旗本の用人」というギリギリの「武士」であって、たまたま就いた仕事も主人（旗本）の息子の御守役のような仕事であって、その息子のわがままにイヤ気がさして「木枯らしに思い立ちけり神の旅」という一句を障子に書きつけて立ち去ったという一件があったのです。

自分では天分があるのでは～と思う文筆で暮らしたいと、書き上げた作品

を当時に流行の先端を行く蔦屋に持ち込むが、そう簡単にはプロの道は開けません。

番頭になら雇ってやってもよいと言われ、こんなところでも働いておれば、先輩から教えてもらって、道は開けるのかなあ～と思いながら、蔦屋の中でウロウロしていると、いや、文章を書くのなら、まずは身を固めた方がよいとかいい加減なことをいわれて、それもそうだなあと思って選んだ結婚相手が「お百（ひゃく）」。どこから、この縁談話が来たのでしょう。不明ではあります。

内容はお百が養女に入っていたのが、越谷荻島出身の履物（はきもの）屋。実家の父は現・岩槻市末田（すえだ）出身、母は現・越谷市荻島出身です。

馬琴は、履物屋主人になったのです。侍の身分を捨てるということは、馬琴にとって相当の覚悟が必要だったことでしょう。しかし、貸家ももっている履物屋の主人におさまれば、生活費の苦労はなくなり、安心して著述に打ち込むことはできるし、いよいよ、大作・南総里見八犬伝（なんそうさとみはっけんでん）執筆の気運は整ってきたということになると思われます。



里見義実　歌川芳艶・作

明治中期来日の英人フレデリック・イーストレイクは日本のシェイクスピアと称賛（しょうさん）。

文化４年（1807）刊行の「椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）」、文化 11 年（1814）からはいよいよ、「南総里見八犬伝」のが始まり、天保 13 年（1842）に 98 巻・106 冊の超大作が完成するのですが、その間、天保４年（1835）に両眼異常、天保６年（1835）の息子・宗伯の死去、天保 10 年（1839）両眼失明で、宗伯の妻・お路の口述筆記開始。天保 12 年（1841）妻・お百逝去などの大事件あり。ようやく、天保 13 年（1842）に執筆完了、最終巻刊行。

○八犬伝。文化 11 年（1814）から、天保 13 年（1842）、28 年にわたる執筆でした。その間に、上記のように、①「両眼の異常」から始まって、

②息子の死③両眼失明④お路の口述筆記開始⑤妻の死～と、まさに襲い掛かる大波の時期でした。

かけがえのない息子と妻の死、そして、目の見えない暗黒に、筆という自らの発表手段を封じられて、「癇癪持ち」といわれる馬琴がよく耐えたものですね。馬琴こそ、癇癪持ちどころか、おそろしい「我慢持ち」だったというしかないですね。

○八犬伝の執筆途中での両眼失明。せっかくの人気作とて、途中で筆を折るわけにはゆかず。最初は出版先の人たちの援助を依頼したのですが、歴史小説は用語もむつかしく、みんな手をあげてしまう～息子が生きておれば、彼も創作が好きだったようで、何とかなったのでしょうが、先に亡くなってしまっている。頼めるのは息子の嫁の「お路」しかない。実家は医者だったのですが、歴史なんて「素人」。始めは、馬琴もあきれるほどでしたが、頼めるヒトが他にいないのだから仕方がない。無理無理お願いして、お路も３年間、口述筆記の山のような苦労をしてようやく執筆完成したのでした。

○決して「越谷出身」だから～といってヒイキする訳ではありませんが、これは事実なのでしょうか。

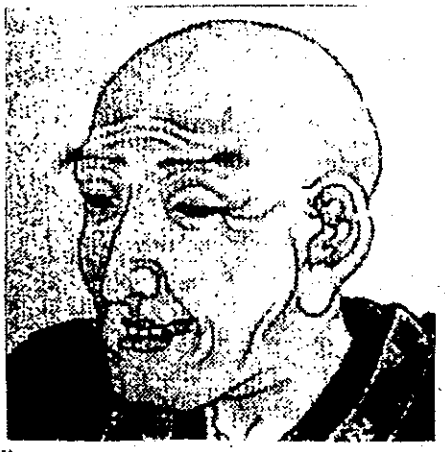
「お百＝悪妻」というイメージが世間には定着しているようですが、これは馬琴が表向きで「うちのかみさんは悪妻、悪妻」といっていたのは、「お世辞」であって、それを真面目に受け取った方々の誤解があったのが「らしく」なってしまったのではないだろうか～という考え方も出てきたようです。馬琴の残した記録には、江ノ島、鎌倉、塔の沢温泉などにも連れていったことがあったようで、「お百さんサービス」もしていたのです。

○お百のお母さんが越谷荻島のお百の兄・六左衛門の家で亡くなった際には、馬琴は荻島に駆けつけて葬儀の手伝いもしたようです。武士の生まれで、田舎の葬儀なんて慣れていない馬琴が義兄の家に出かけて、まして手伝いをすることなんて考えられないこともしているのです。

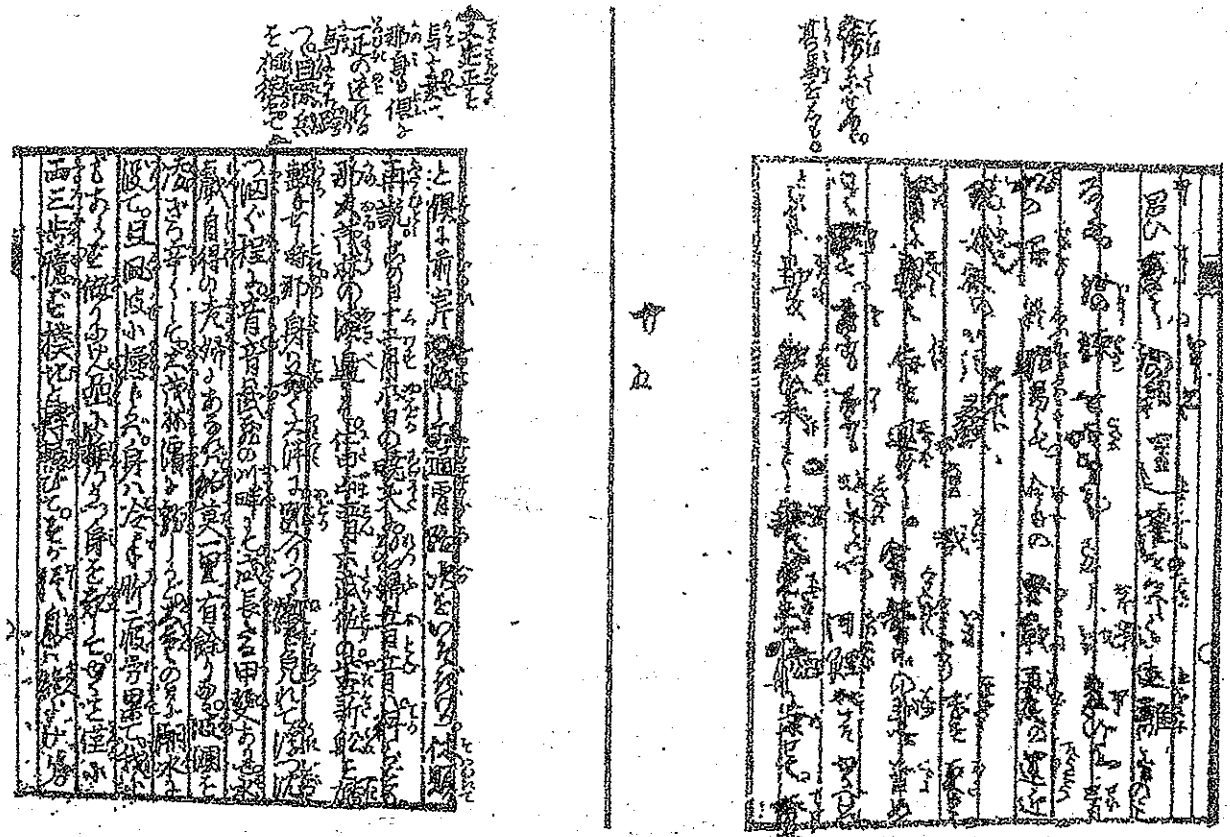
そして、馬琴、お百、息子（宗伯）は最後には仲良く四人一緒のお墓に入っています。八犬伝ほどの大ロマンを書いた馬琴さんのことです。私たち素人をだますぐらい、簡単なことでしょう。馬琴さんの家庭生活も表面に見えることだけで、すべてを信じてはいけないということを頭においておかなくてはいけないということですね。

○もうひとつ。馬琴というと、せっかちで怒りんぼう。その対極ですぐに思い浮かぶのが浮世絵の葛飾北斎。竜虎！　馬琴の作品に一番多くの挿絵を描いたのが北斎であるといわれています。お互いに相手の天分に敬意を払ってのことか？　こいつはウルサイ奴だから、怒らせないようにしなくっちゃ！とお互いに敬遠したのか？

文化３年（1806）の春から夏にかけての３～４か月、二人が馬琴の住まいの同居し、仕事に励んだといわれています。



葛飾北斎像　渓斎英泉作
朝日新聞　H6.11.11 夕刊　「北斎 ‘どんな顔だった」
北斎娘・応為栄女集　久保田一洋著　藝華書院刊　2015.4



『南総里見八犬伝』第九輯（早稲田大学総合図書館所蔵）。右．が眼の悪化した馬琴の草稿、左．がお路の代筆草稿。

☆もう一つの馬琴と越谷の関係

忘れては、もったいないことがあります。馬琴が、文筆で身を立てようとしたキッカとなったのは、5、6歳のときに、兄に連れていってもらった俳句の道、越谷吾山先生のところだったと思われます。


越谷吾山

字が書けるか、書けないかのときに、兄の真似をして俳句を造ることが、少年・馬琴にはどんなに嬉しかったことでしょう。

のちに、世界的な作品である「南総里見八犬伝」を生むに至った馬琴の文学的才能は、俳句の先生によって芽生えたのです。

先生は、越谷生まれ（享保2・1717）。51歳（明和5・1768）で江戸に移り、芭蕉没（元禄7・1694）などの後の佐久間柳居の柳居派や沾山派（二世沾山の派）に属し、日本橋駿河町などに住んでいたようです。

馬琴青年は吾山に「どうしたら、俳句が上手になりますか」と質問したこともあったようですが、先生は「日夜怠りなくしていなければいけません。その努力こそ、石をも穿つものなのですよ」と答えたようです。

吾山が有名なのは、「物類称呼」という、「方言辞典」を編集したことで、日本における方言学は、ここから始まったのです。

越谷出身の実母と養父を持つ「お百」を妻とした馬琴！

彼は幼いときから、俳句を越谷出身の先生から学んでいたのです。

と、いうより、日本で「方言学」という学問をスタートさせたヒトが幼い時からの俳句の先生だったのです。

先に取上げさせていただいた写楽と越谷の関係といい、この馬琴と越谷の関係といい、江戸時代の文化人とこんな密接な関係を持ったヒトがいるのは、県内はおろか、国内でも「越谷」以外にはない～と断言してもいいのではないでしょうか。越谷はシビック・プライドのまち！　奇跡のまち！

東洲斎写楽作品　新潮日本美術文庫21　日本アートセンター編　新潮社刊　H17・2刷
法橋（越谷）吾山・肖像　方言に憑かれた男　越谷吾山　杉本つとむ著　さきたま出版会刊　H.1